

OcuacNews

1996.7.1

No.19

新副会長、新幹事長を迎えて 平成8年度 山岳会総会開催

4月21日(土)、JR保養所にて総会が行われました。

総会では例年通り平成7年度の報告が行われました。役員の変更があり、副会長に川勝氏、幹事長に佐々木氏が選任され、企画運営、総務幹事に変更がありました。選任された役員は下表のとおりです。

会 長	池永薫爾
副 会 長	*川勝弘一
幹 事 長	*佐々木惣四郎
企画運営幹事	藤村達夫、*大島一恭
総務幹事	*福山昇二、矢倉 睦、 *小松 稔、*浅部禎一
山岳部指導幹事	小倉裕史、尾形達也、 高尾 裕
会 計 幹 事	八木信男
会 計 監 事	高木健次、廣瀬秀雄
東京支部長	廣谷光一郎
山岳部部長	小林治俊

(*印 新任)

また、有志より「山小屋建設準備委員会」の設置についての提案があり、久保田氏から候補地の下見状況、大島氏から趣旨説明の後、承認されました。

記念講演は、会員の山本勝氏(昭30経卒)が『再開した山登り』と題し、50才台後半から山登りを再開され、南アルプス縦走、ヒマラヤ・トレッキング等精力的な山行をされている状況をユーモアをまじえて講演され、特に例年行事の山岳会の立山山行を楽しみにされているとのことでした。

続いて会員で日本山岳会の理事を務めた片岡氏(昭55商卒)から、減少している現役部員の獲得策の参考になればとの意味を込めて、同山岳会学生部が行った大学山岳部アンケート調査より各山岳部が抱えている部員減少の問題・悩み等についての報告がありました。☞

1996年度 アルパイン活動の目指すところは・・・！！

新任幹事長 佐々木惣四郎

前任の藤本幹事長が雪国に旅立たれ、当分のバトンタッチを受けることになりました。ややもすれば縁が遠くなり、生活の中に沈み込んでしまいがちな「山」「自然」を振り返る便りを皆様と共に書き上げられれば、と思っております。川勝氏、岡本氏も、それぞれ副会長、顧問として、迷子にならぬようバックアップしていただいております。行動隊キャップとして安心しております。

今深刻な問題は、現役部員が少ないこと、若手メンバーが少ないことです。それだけ社会が多様化、複雑化してきており、「山」なり「自然」へのアプローチのやり方が多岐にわたってきた為と思われれます。同時に、実年化が進み、個性化に拍車がかかっているようです。

このような流れの中にあって組織、サークルをスムーズで活性化の高いものにする事は、難しいことかもしれません。正直言って、会社という組織の中でも、決められた事がスムーズにいかないケースが多いのですから…。

しかしながら、言葉上ではうまくいなくても、まず言葉の理念をはっきりさせ、素直な原点である「山」「自然」にかえて、お互いの仲間が、気軽に声を掛け合う雰囲気や育てばよいのではないかと思っております。甘口派、辛口派等、夫々好みはありますが、それぞれの好みを活動に生かしてゆきたく。

平成7年度 一般会計報告（平成7年1月1日～平成8年3月31日）

収入の部	金額	備考	支出の部	金額	備考
前年度繰越金	¥70,574		通常総会費	¥303,115	
通常年会費	¥622,000		通信及び印刷費	¥377,355	山岳会ニュース 行事案内・振込 手数料
臨時会費	¥228,000	通常総会出席者	関係団体負担費	¥78,500	OCUSA, JAC, 府岳連
雑収入	¥14,610	寄付金・利息	企画行事費	¥77,962	ポート祭・立山 カンジロバ・パー ドウォッチング
			雑支出	¥92,146	慶弔費等
合計	¥935,184		合計	¥929,078	
			残高	¥6,106	

平成7年度行事活動報告

企画運営幹事 佐々木・藤村

- ①4月29日(土)～5月6日(月) (立山 雷鳥荘)
第3回立山の自然の旅(責任者:大島)
山岳部新人部員歓迎会(奥田・高尾・吉元・沈)
計4名
山本、藤本夫妻、上堂、小笹、久保田、山辻、伴、佐々木、丸子、山田親子、島川夫妻、兵頭、宮崎、大島、会友:宗實夫妻、小寺 計21名
悪天候のため、三田平より剣アタックならず、前剣のみ。立山縦走、別山乗越、スキー、温泉、酒盛りと大盛況。

- ②5月28日(月) (桜宮 大川)
第104回大阪市立大学ポート祭(責任者:清原)
リルン1号(清原・苑樹・佐々木・山辻・西田C)
リルン2号(川勝・小笹・福山・小松・大島C)
応援団 南・浅部・上堂・水江・八木・沈
計16名

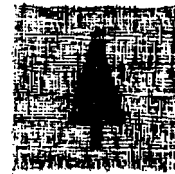
一週間前の練習の甲斐なく、一回戦突破ならず。方丈記にある「ゆく川の水の流れ…」で、我々の心はまだ、大川畔にあって青春の夢をむさぼっていますが、はや肉体は安治川にさしかかっております塩梅。

- ③10月7日(土)～10日(火) (上高地 穂高)
穂高紅葉の旅(責任者:福山)
上堂・久保田夫妻・山田・兵頭・大島・佐々木夫妻・西田夫妻 計8名
悪天候(雪)の為、岳沢組と濁沢組の前穂高ドッキングはならず。北穂から見下ろす横尾本谷BCに懐かしさのあまり涙する。山小屋は超高級となっても山々は20年前と変わらない。坂巻温泉の露天風呂はご推奨。

- ④11月23日(火) (大阪 上本町)
第3回「初登頂 おおいに語ろう会」
カンジロバ峰初登頂25周年(11月7日)
(責任者:奥田)
泉夫人・後藤一家・大橋・池永・藤本・大倉・浅部・山辻夫妻・伴・岡本・常慶・佐藤・諏訪・奥田・沢井・広瀬・大島・沢田・和田・水江・竹中(会友) 計25名
当時の8mmフィルムと沢井弁士の弁舌で大いに盛り上がる。

- ⑤2月25日(日) (伊丹 昆陽池)
第3回バードウォッチング(責任者:藤本)
川勝夫妻・門田・藤本夫妻・上堂・山辻・島川夫妻・福山・準会員:稲垣・宗實 計12名
昆陽池のカモと「昆虫館」の蝶々ウォッチングとなる。その後、藤本宅にてカモ鍋ならぬ焼き肉・グルメ大会となる。

<年間延参加人員88名>



平成8年度 行事計画

企画運営幹事 藤村・大島

- ①4月27日(土)～5月6日(月)
第4回立山自然の旅
山岳部新人部員歓迎会(予定)(責任者:大島)
②5月26日(日) 第105回大阪市立大学ポート祭参加(2クルー参加の予定)(責任者:清原)
③7月 滞在型スイスアルプス自然の旅
(責任者:佐々木)
④8月 北海道自然の旅 (責任者:上田)
⑤10月 笠槍穂高紅葉散策の旅(責任者:福山)
⑥10月 銅板会(上高地)(責任者:藤本)
⑦11月 第4回バードウォッチング(比良)
(責任者:川勝)

★会員・会友の皆様の積極的な参加をお願いいたします。

★ご要望やご意見がございましたら、事務局または幹事までお願いいたします。

平成7年度活動報告

- ◇平成7年1月26日 新年会
谷口・山本・堺・北濃・丸子・佐藤・宮崎・
沢井・西村・兵頭・義本・片岡・奥田13名
- ◇2月27日 片岡君・柴原氏送別会
大倉・広谷・伴・丸子・宮崎・兵頭・西村・
片岡・奥田・柴原(準会員)・梶田(神戸大)
山田・中山(京大) 13名
- ◇11月18日 日本山岳会青年部主催
山岳部監督者会議 奥田出席
- ◇11月25日～26日 忘年登山・宴会
雲取山東南、三条の湯
山本・伴・山田・兵頭・西村・柴原・
三上(会友) 7名
- ◇平成8年3月18日 山田・武部両氏歓迎会
山本・伴・山田・沢井・兵頭・西村・義本・
武部・奥田・柴原・三上 11名

平成8年度活動計画

- ◇4月27日～5月6日 剣岳アタック
大阪本部計画に合わせる (責任者：兵頭)
- ◇5月下旬～6月上旬 奥秩父または八ヶ岳
シャクナゲ山行 (責任者：西村)
- ◇7月下旬～8月上旬 丹沢沢登り
(責任者：奥田)
- ◇7月下旬 アルプス縦走 (責任者：沢井)
- ◇9月 百名山(長野県) (責任者：西村)
- ◇10月 日帰り山行 (責任者：沢井)
- ◇11月 忘年山行 谷川岳 (責任者：兵頭)

★東京支部以外の会員・会友の方も都合がよろしければ、ドシドシご参加下さい。

総会欠席者のひとこと

- 出欠はがきより抜粋 -

[会 員]

- ◆平野義明 81才の高齢となりました。まだ元気ですが、在宅が多く、山行はストップ。総会の日都合が悪く、参加できません。
- ◆西村正巳 腰痛の為ゴルフもできなくなり残念です。会員の皆様のご多幸と山岳会の発展を祈っております。
- ◆富村恒次郎 ここ数年入退院の繰り返しで失礼を重ねております。山岳会の各行事には頭の下がる思いです。今回は断念させていただきますが、次回は是非出席すべく自重します。
- ◆白井順三 大阪商大山岳部OBが出る幕ではない時代になってきたことを痛感します。市大山岳部出身者の出番ですね。会長の代わったことをきっかけに大いに活躍して下さい。「山岳会ニュース」に載る記録に地図をつけていただけませんか。

- ◆馬野庄二 最近はスキーとゴルフの練習に精出しています。山本勝君も久しくお会いしていないので共に痛飲、放吟したいと思っております。
- ◆堺 皓二 心身ともリフレッシュしました。ぼつぼつ動こうと思っております。丁度今は花見を楽しんでいるところです。
- ◆伴 明 昨夏は甲斐駒賞運谷右俣を始め5回沢登りをしました。日本の沢登りはスバラシイ。今年も同好の志を募ります(年齢不問)。
- ◆林日出雄 退職後は小農業。地域社会のお世話、小旅行、小山歩きと仲間の世話焼きとマママ多忙な日々です。
- ◆近藤哲也 東京勤務から解放されません。毎回欠席で申し訳ありません。
- ◆中島信正 関東の端に来てもう6年目を迎えました。タイミングが合わず出席できません。皆様方によろしくお伝えください。関東周辺の百名山へ1つでも多く登るように

努めていますが、うまくゆきません。

- ◆長谷川ふみ子 あわてものなのでよく読まないで記入を始めましたが、転居も離婚もしておりません。ただちょっと足を折りまして、家の中で松葉杖という無様な生活を強いられております。皆様もどうかお気をつけて。
 - ◆上田忠士 北海道転勤満10年になりました。元気でやっております。5月中旬までは山スキーのシーズン。今も体力維持のためやっております。北海道に来られる時は是非ご連絡を下さい。
 - ◆佐藤一良 2月にグリンデルワルドに行き、ユングフラウヨッホからユングフラウメンとアイガー北壁をタンノウしてきました。
 - ◆沢井弘忠 今年は100名山のうち8山は行くぞ!!
- [準会員]
- ◆柴原 勝 東京支部の催しに参加させていただいております。皆様によろしく。

5月山 劔山行 (第4回立山自然の旅)

水江清一

メンバー：佐々木、久保田、上堂、苑樹、大島、
福山、水江

4月27日 曇-晴

美女平ターミナル(泊) - 室堂 - 雷鳥荘 - 雷鳥
沢 - 劔御前小屋 - 三田平(テント)

前日より自家用車にて乗り合わせ、真夜中に全員美女平に到着。私にとってはほぼ5年ぶりの山行で、運動不足も思っていたされ、少々不安。先輩諸氏は何か生き生きとして恐ろしい。

室堂に降り立つ。天候曇、風無し。前日買っておいたにぎりめしなどを各自ほおぼり、手短に朝食を済ませ、いよいよ山行が始まった。全員UVクリームを顔にたっぷり塗っているの、異様なおじさんの行進となった。雷鳥荘にて入山手続をお願いする。いよいよ運動不足が気になる雷鳥沢の登り、先輩諸氏はいっこうにバテない。グングン登っていく。天候も回復し、暑い。忍の一字で劔御前小屋に着く。あーしんどい。

大休止の後、ブラブラ三田平へ下る。流石ここまで来ると静かだ。前方に劔岳がドカンと座っている。気持ちがいい。雪が多い。明日からのルートを話し合いながら、わいわいめしを食った。

4月28日 曇

三田平 - 劔沢下降 - 長次郎谷出合 - 長次郎谷
- 長次郎右俣コル - 本峰 - 別山尾根 - 三田平

夜半より風が出てテントをたたく。すぐに止むと皆たかをくくって寝ていたが、止んだのは朝。途中強風もあり、一度ベグの点検、締め直しに出る。ポールの変形、一部破損。全員寝不足。

風が止むとガスも切れ始め、今日は沈澱かと思いきや天候は回復基調、少し遅くなったが、長次郎谷 - 本峰ということで出発。長次郎谷出合まで一気に降りる。

劔岳東面でも登山者は極端に少ない。本日会った他パーティーは、八ッ峰2、3のコル付近と本峰稜線の2パーティーのみ。三田平のテント場も

10張そこそこで10年前に比べると比較にならない静けさ。

長次郎谷を登り始める。源次郎尾根、八ッ峰とも雪がベツタリ、今年は雪が多い。昼前よりあちらこちらでブロックが落下。

時折おこる雪のシャワーを見物しながら、懐かしい熊の岩に近づいていく。右俣右岸よりブロックが崩壊、全員足下をさらわれ肝を冷やす。『こんなヤバイとこに長いことおられへんで』。危険を感じ、昼のレーションもそこそこに一目散に右俣コルを目指した。コルより雪壁1ピッチ、往年のクライマー佐々木氏が登る。ザラメ状の雪でアイゼンが滑る。現役の時は簡単に登った記憶があるのに、『あ〜きびしい』。

本峰は我々のみ。高曇りながら眺望は最高、劔西面も雪がベツタリついている。時間も遅いし、別山尾根の下降も手強そう。早々下る。平蔵避難小屋で一服。本峰をバックに記念写真を撮る。

平蔵谷をシリセードで降りる楽しみは、全員一致で却下。肝を冷やすのは、一日一回までという会則を守った。腹が減ったけど、前劔の下りはアイゼンを蹴り込み、慎重に降りる。富山平野のたんぼがオレンジ色に光る。今日の長い山行の終わりが近づいてきた。『しんどかったけど、おもしろかったなあ』と全員納得。薄暗い雪渓をテント場へ。山本、小笹先輩の暖かいコーヒーが待っていた。

4月29日 曇

三田平 - 別山尾根 - 本峰 - 同下降
メンバー：小笹、佐々木、苑樹

往年のクライマーの三位一体バトルと思いきや、ルート途中にて珍客登場。テント帰還後、珍客と一緒に楽しい話にいつまでも聞き入る・・・

第Ⅲ回バードウォッチングの会

山辻英也

1996年2月25日、伊丹駅に次のメンバーが集合。

- ・フクロウのおじさん門田ドクター、
- ・アフリカの駝鳥の川勝さん、
- ・笑いカワセミの親分は藤本さん、
- ・夏の雷鳥に似た西田さんはバードウォッチングの元祖である。
- ・途中から昆陽池に飛んできたヒヨドリ上堂君、
- ・ホワグラが美味そうなダックス島川先生はバードウォッチングの先生。
- ・痩せたペンギン福山ショウちゃん、
- ・白鳥とオシドリに例えられる川勝幸子さん、島川夫人、
- ・神戸より飛来、セキレイの稲垣先生、
- ・ハヤブサに例えられる精悍な山辻、

以上、11羽の鳥々でした。

11人揃ったところで、名古屋コーチンの集まりの中高年ハイカーや、ヒヨコの園児の集団が出発した後から、各々3台のタクシーで飛び越え、藤本さんの案内で、伊丹市昆陽池へ。白鳥、カルガモ、

ハシビロガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ等鴨すきにすれば美味そうなカモ達。厚かましく餌をあさるユリカモメの大群。中の島ではアオサギ、マサギ、ぼけっと空を眺めているカワウを望遠鏡で観察し、カメラに収め、飽かず眺める。

昼前に伊丹昆虫館へ移動。薄ら寒い曇り空、今にも雨が降ってきそうな天候だったが、この「蝶の館」は常春の温室で、ホッと一息。中ではアゲハ、キチョウを始め、たくさんの種類の美しい蝶々が、更に美しい花々を飛び交っていた。平和な休日をかみしめながら見学した。

その後昼過ぎ、各々、山の上にある雲雀ヶ丘の餌場に集合。ここでカルガモ母さんの藤本光子夫人、メジロのように愛らしい義母、コウノトリの如く脚の長い、光子夫人の友人の松井さんによる丹精込めた料理の数々にありつく。

因みにそのメニューは、肉のタタキ、ヤキトリ、イカの造り、寿司、大根とゼンマイの煮付け、からし明太子のじゃがいもあえ、鳥肉のダンゴetc…。酒は新潟の”ツルカメ”、これも又、美味しかった。

夕暮れには、ホロ酔い加減の鳥たちは各々の巣へ散会となった。☞

北ア・黒部川上ノ廊下～薬師岳山スキー (一ノ越～北ノ俣岳)

田中博之

【メンバー】

芝田(阪大ワンゲルOB)、高尾(京大山岳部OB)、山森(京大山岳部OB)、田中。すべて中年のおっさん

【行程】

- 5/2 室堂～一ノ越～御山谷1800m～2056m峰の西側に登り返し～中ノ谷1700m～刈安峠～五色ヶ原に向かって2100mまで
- 5/3 ～五色ヶ原2380m付近～ヌクイ谷1900m～越中沢岳東の2408m峰～廊下沢下降～黒部川～スゴ沢出合右岸台地
- 5/4 ～スゴ沢登り返し～稜線を薬師岳～薬師沢右俣～薬師沢三俣
- 5/5 ～薬師沢本流と左俣の間の尾根を2300m付近まで
- 5/6 ～北ノ俣岳～神岡新道～打保



平成3年のGWに片岡さんの発案で狙い始めたスキーによる柳又谷ゴルジュ滑降は、以後3度の敗退を繰り返しながらも、昨年のGWに柳又谷横断という形となってとりあえずは満足し、完結してしまった。それで、今年はどこに行こうかなどと多少悩んで、まあ柳又谷の次は黒部川の本流かななどとぼんやり思っていたら、高尾君が一週間かけて谷から谷をつないで立山から黒部川を渡って槍まで行こうなどという大変なことを言い出した。もう40になるよれよれ中年に一週間分の荷物を背負ってスキーをしろなどというのは不可能な話だ。おまけにGWといってもぼくは一週間も休めないぞ。というわけで計画は実働四日に短縮されたけれど、予備日なしで行くには恐ろしげなところなので、けっきょく一日休んで五日の計画で出発した。

5月2日 室堂から一ノ越へは連休の狭間といってもたくさん人がいて、行列状態である。御山谷も雑誌に取り上げられたりしているだけにそこそこ人が滑っている。その中でぼくらが一番重荷のようで緩斜面をヒイヒイいいながら滑る。約1800mあたりから獅子岳の南東尾根ともいべき稜線の2000m地点に登り返す。ここにはスキーのシュプールがあり最近滑った人がいたようだ。この登り返しはシールが効いて快適に登れた。次は中ノ谷に向かって滑る。出だしが急でおじけづくが、少し滑るとあとは快適なはず。ただし荷物が重くて実は快適でなかった。対岸の尾根の上部斜面に雪の亀裂が見え、雪崩れそうなのが迫力満点で、急いで危険地帯を通過して刈安峠への小尾根に取り付く。この登りはけっこう急でツボ足で登ったが、若干1名はスキーにこだわりシールで登ってきた。尾根に出るとトレースがある。こんな時期でも五色から平に行く人がいるんだなあと感心しながら、シールをつけて比較的細い尾根を何とか登る。しばらく行くと人影が見え、トレースだけじゃないのかと思っていたら、それは鉄砲撃ちのおじさんであった。2100mあたりまで頑張っただけ泊まる。夜は風雨強し。

室堂(9:35)-御山谷1800m(11:30)-中ノ谷(12:50)-刈安峠(13:50)-2100m(15:15)

5月3日 朝になると雨はやんで晴れた。ただし雪がカチカチになっている。とりあえずアイゼンで登る。少し登れば傾斜も落ちて、もう五色ヶ原の一角にたどり着いたようだ。2380mあたりから滑降するわけだが、かなりな急斜面なのでカチカチ山状態ではこわい。しばらく待機するが風が強くて雪はちっともゆるみそうになく、やけくそでつつこむことにする。転ぶと谷底まで行きそうだが、それでもこわごわターンなどして滑る。200mほども滑り降りれば雪もゆるみだし快適ターンに変更である。ヌクイ谷の底からの登路には越中沢岳の東の2408m峰から延びる2本の尾根のうち、下部は急だが上部は楽そうに見える東側の方を採用する。予定通り下部はツボ足で登らされ、中程からはシールをつけて快適に行けた。そして今山行のハイライト廊下沢の滑降から黒部川である。廊下沢はまっすぐ南に下るので稜線から黒部川までずっと見えている。途中で雪が切れている気配はない。これを見るまでは、廊下沢の源流だけ滑って黒部川には出ずに登り返そうという日和

見意見もあったのだが、もはや行くしかないぞ。地図にあるゲジゲジマークの部分は雪が解けてゴロゴロ岩が露出しており落石危険地帯である。見える限りでは雪崩が廊下沢本流に届いているものはない。むしろ源流部のみを滑ると、登り返し予定の沢に雪崩のリスクは高そうだ。稜線を反対側に越えて廊下沢を滑る。上部は急だが、もう雪はゆるんでいるので快適な滑降である。落石危険地帯の上で少し休んでから、あとは一気に黒部川まで下ってしまう。廊下沢は全く切れていなかった。黒部川に出ると、さすがに大黒部は雪の間を悠々と流れていた。廊下沢出合あたりにはスノーブリッジさえ見あたらない。スゴ沢に登り返す予定なので、理論的には黒部を渡る必要はないのだが、左岸を行くと一カ所なかなか厳しいへつりを強いられそうなどころがある。川は融雪で増水しており落ちるとたいへんだ。よって黒部川渡るべし。徒渉ができそうなどころはあるができれば避けたい。幸いにも崩壊寸前の亀裂入りスノーブリッジが残っており、危険で濡れないのと安全で濡れるのとの選択を迫られる。迷うことなく危険を選択。まあ徒渉も安全とはいいいかねるが、豪雪の今年がこれなのだから例年は徒渉すしかないのかもしれない。とにかくも無事スノーブリッジを通過。ちょうど中州に渡ったような形になったが、右岸に渡るには立派なスノーブリッジがあり問題はなかった。スゴ沢と中ノタル沢の出合には左岸渡り返すにんの問題もない超豪華なスノーブリッジがあり、ほっとする。

気が付くと太陽には曇がかかり、明日の悪天を保証している。こんなところで天気が崩れては恐ろしいのだが、中年よれよれ登山隊にはもはや稜線に登り返す力はなく、スゴ沢出合の右岸の台地に泊まる。

出発(6:15)-2380m(7:10-7:50)-ヌクイ谷横断(8:20)-2408m(11:05-11:30)-黒部川(12:30)-スゴ沢出合(13:20)

5月4日 天気予報では今日一日は雨は降らないらしい。

豪華スノーブリッジを渡りスゴ沢にはいる。雪が堅いので2人はツボ足、2人はこだわりのシール登行だ。下部で少し滝が出たところがあったが、左半分は雪に埋まり、こだわりシールで滑るとやばい程度で問題はなかった。滝を越えるとほどなく二俣でここで全員スキーを履く。ここから右俣

を行けば傾斜も緩く、見える限りは雪庇の危険もなさそうだが遠回りになる。左俣を行くと上部が急で、稜線には特大雪庇がぶら下がっているぞ。ここでも危険が選択される。しかし、安全地帯まで必死になって頑張ったのでペースがあがり、稜線まで高差約600mを2時間弱で登るなんて、よれよれ中年登山隊には出来過ぎである。稜線にはさすがにトレールがあるが人は全然いない。ここらは日本のオートルートなどと呼ばれているのではないのか！確かにスゴ乗越からは尾根も広くて北薬師岳の手前までは、悠然とスキーで登って行ける地形である。天気によければのんびりしたいところだが、なにしろ天気は予報通りの下り坂だ。気持ちだけはあせるぞ！体はあまり動いていないのだけれど。北薬師あたりからは巨大雪庇が金作谷に飛び出しているが、これだけ大きいと簡単に根元から折れることもないだろうと、安心してコンタクトラインをスキーで行く。まあスゴ乗越から薬師岳まで一部雪がなくてスキーを取ったところもあるが、基本的にはスキー向きの登り斜面である。それでもわれわれは朝の登りで力を使い果たし、薬師岳までに6時間弱を要した。頂上直下で学生らしい2人と行きちがう。御山谷以降下山までの間、鉄砲撃ちを別にすれば会ったのは彼らだけだ。頂上からシールを外す。避難小屋まではわずかながら登りもあり、できればカールに滑り込んで東南尾根に登り返したいところだが、天気も悪くなるしパワーもないのでやめた。避難小屋をかわして薬師沢右俣にはいる。上部はカリカリだったが、すぐにゆるんで快適な滑降を楽しめる。今日はついに雨は降らずに、一日中高曇りだったから雪もくさらず最高だ。どんどん下ると最後の方は沢が狭く傾斜もなくなるが、それでもなんとか滑る。このまま薬師沢の本流まで行けるかと思ったが、残念ながら、ついに雪が切れて水が出てきた。ささやかな高巻きをしなければならぬ。といっても、せいぜいスキーを付けたままできるような技ですみ、要するに大したこともなく薬師沢本流との出合に着いた。

出発(6:10)-スゴ沢源頭(8:05)-薬師岳(13:45-14:00)-薬師沢三俣(15:30)

5月5日 3時頃起きるとテントが妙に狭い。湿雪にテントが潰されていたのだ。あわてて除雪する。明るくなると、ものすごい勢いで重そうな雪が降っていることがわかった。フライを取ると、

今度はしばらくして雪が雨になる。またフライを張る。

雨が小やみになったりするので、1時前から少し行動してみる。薬師沢の本流と左俣の間の尾根に登る。樹林帯を抜ける頃から風雪厳しく視界はなくて、前進を断念。視界のない中、モナカ雪に苦しんで薬師沢まで戻ろうとしていたところ、たまたま見つけた樹林の蔭が風もないのでテントを張った。

出発(12:45)-2350m付近(14:20)-2300m地点(14:35)

5月6日 幸いにも晴れ。周囲の山は雪化粧して冬山的景観だ。昨日の尾根に登ると小1時間で主稜線に出る。そしてダラーと広い稜線を北ノ俣岳に立つ。あとは神岡新道を下るだけ。風があるので上部の雪はここでも堅い。しかし、少し滑れば、荷物も軽くなっているののでほんとに快適に滑れる。会心の回転をしているとあっという間に避難小屋に着いて楽しい滑りはおしまいだ。もっともこの斜面を昨日に滑っていたらルートファインディングでスキーどころではなかつただろう。視界がないと寺地山への尾根をうまく当てるのは至難の技だ。

避難小屋から下も雪はまだまだ続く。登りは寺地山の100mばかりと途中で横切る沢からの数10mだけなので、まだまだ滑れるはずだ。でも立木だらけで快適さはゼロ。沢を横断してコルからの最後の打保谷川への下りなどは、常識ある人はスキーを外すんじゃないかという斜面だ。途中で何度かスキーを外したりしながらも(若干1名はスキーで泥壁を飛び降りたり渡渉したりして、ついに外すことなく)粘りまくって林道の1100mまで滑って、というよりとにかくスキーにこだわって下山した。

出発(6:20)-北ノ俣岳(7:50-8:00)-寺地山(9:50)-打保の最終人家(13:25)

☆

以上の記録は、パソコン通信Nifty-Serveの山のフォーラムに田中氏がアップした記録をほとんどそのまま転用させていただきました。(編集注)

白馬岳北方稜線 単独行

和田城志

厳冬の黒部別山、ハッ峰北面の未踏ルート挑戦は、正月、3月共に不発に終わった。パートナーの都合で中止、消化不良の一年だった。山に入らねば、年は明けぬ始まらぬ。仕事が忙しく休暇をやりくりして、やっと10日間の単独行が実現した。白馬岳より日本海親不知の嶮に伸びる北方稜線は学生時代からの憧憬の山稜だったが、剣・黒部にうつつをぬかしているうちに、登るチャンスを持ってずにいた。同行してくれる仲間もいなくなり、ハードなクライムにも縁遠くなった身にはお似合いの計画かもしれない。

3月23日未明、田舎町のクラブで働くのだろう、いかにもジャバゆきさんという風情のフィリピン人と同席した夜行列車は富山駅に、ほとんど無意味な正確さで滑り込んだ。普通列車の連絡で待合い室に入る。まばらな人々が思い思いにうづくまっている。酒と体臭でむせかえるようなホームレスが数人、華やいだスキーギャルと奇妙なコントラストをかもしだしている。私はどうも明け方の空気が好きになれない。朝日に輝く今日への期待より、夜霧に落ち込む昨日の後悔が思い出されて憂鬱になる。快眠のない待合い室の黎明はただ重い疲労感に支配されていて、いっそう暗い。ドーン・メランコリー！！

さまざまの夢破れては涙涸れ
家なき人の駅のかたすみ

無人のJR親不知駅下車、波頭砕ける冬の海に小雪が舞う。低い雲がたれ込め、鉛色の海原を見下すようにして、急傾斜の崖に学校がある。青海町立歌外波小学校、いい名だ。車窓より見た市振の海岸線には破れ苫屋が居並んでいて、過疎の漁師町の侘びしさがいっそうつものった。この小学校も子供不足にちがいない。

人影絶えて苫の荒れ屋の 枯篠
学びの窓に潮風のうつつ

外波川沿いの林道に入れば雷道となり、ワカン装着。登山用具一式、レーション、ペミカンのボリュームたっぷりだ。ザックははちきれそう。うん

ざりする負荷、ひたすら冬枯れの藪山と格闘する。尻高山を越え、白鳥山手前の鞍部に天幕を張る。

翌朝、白鳥山頂にある山小屋でスキーの人々に出会ったが、以後下山まで人影は皆無、静寂無垢の雪稜漫歩となった。なだらかな山稜が右に左に曲折して延々と伸びている。遠くに剣岳本峰がかすんで見える。犬ヶ岳前後は尾根が狭くなり、巨大な雪庇が張り出しているが、それより以南は広々とした稜線だ。山スキーには絶好のフィールドだ。

疲労感がすぐとれないところが中年たる所以だろう。二つ玉低気圧通過で大荒れ、犬ヶ岳を越えた鞍部で一日停滞する。狭い天幕の中で天気図をとり、ラーメンをすすり、本を読む。まことにシンプルな一日だ。

さわがに山、黒岩山を越え、長楯山に到れば、白馬岳が間近に見えてくる。どこで失ったか、磁石がない。ヘッドランプも球切れだ。こうミスが多くては少し不安になってくる。濃いガスだが、天候の回復を信じて出発する。地図が読めなくて悩んでいると、雲が流れ始め、見事な青空と純白の長楯山が姿を現した。思わず歓声を発した。長い長いスロープを辿りながら、雲上に浮かぶ剣岳北方稜線を望む。16年前の3月、宇奈月より剣、大日岳へ長駆縦走したことを思い出した。辛く苦しい山稜だったが、私の青春の記念碑的山行の一つである。

身を捨てて 果てなき一歩 夢山陵
理 はばむ 雪の深さよ

陽光溢れ快晴無風、一服して驚いた。水筒のフタがはずれ、ザックの中はビショ濡れ、コンロを出して水作りと装備類を干す。春山ならではの余裕だ。それでも我ながらよく頑張る。無人の山陵、誰と競う必要もないのに、独り寂しさをまぎらわすために、未明には天幕撤収、天気図をつける時間帯も歩いている始末で、夕食を食べ終わると、ポロ切れのようにグッタリしてしまう。

酒は一滴たりとも持ち込まず、睡眠薬がわりのデカルト「哲学原理」では読書の快楽もない。午前3時起床、深夜放送は夜の名残り。演歌と華やいとお喋りを聞きながら、清浄潔癖な寒気漲る北斗、満天の星々に百武彗星を見上げる。ぜいたく最高の展望台で、世紀の天体ショーを楽しんだ。只々単純明解、無言の一週間だった。彗星の果てしてなき旅を想った。

旅人は白き山陵ながめたり
北斗をめざす 闇のつれづれ

今年は久々の豪雪で、朝日岳、雪倉岳周辺はポツテリと雪をかぶり、広大な山懐は氷雪の岩峰にはない懐かしさがあり、かえって新鮮で山らしい山が味わえた。朝日岳から急下降して、赤男山は西側をトラバース、雪倉山への登りが少し不安定な急雪面の捲き道で、雪崩の危険があったが、ウィンドクラストした稜線は歩き易かった。一気に白馬岳に近づいた。

この山陵は確か30年程前に、小林、奥田両氏リーダーシップの元、冬山合宿でトレースされている。連日の悪天、強烈な季節風で顔面凍傷になったこと、リングワンデリングをしかけたことなど、なだらかな山容だが、長さ、雪の深さ、海から突風、当然無人、一級の山陵であると聞かされていた。しかし、3月下旬ともなれば、雪質天候とも安定しており、危険や困難は全くなく、ただ労力のみ気楽な山陵であった。結局、6日間で完走したことになる。

白馬岳山頂から見渡す北アルプスの山嶺は素晴らしく、深い黒部峡谷と剱岳はやはり最高の山だ。来し方北方稜線はまるで山の風格がないが、広大な山域に残してきた一步一步のトレールが私を慰めてくれる。そう思うと山が美しく見えてくるから不思議だ。景色は確かに内に創るものである。

計画では突坂尾根から黒部に下山する予定だったが、長い下降は私の右膝に少し負担が大きすぎて、変更、楯池に下ることにした。登山者は全くいない。天狗原はもう山スキーの人々の世界であり、あのカラフルな出で立ち、カラ身同然軽装でさっそうと滑ってくる。山々に響くラップミュージックの喧噪、私の居る場所はなく、樺、シラビソの樹々に身を隠すようにして下った。スキー場には一瞥もくれず、ゴンドラ、タクシーで一気に白馬大池駅に下山した。駅前の食堂で、ビールとカツカレーで完登を祝した。けだるい疲労感に久々のアルコール、身体の奥底から淡い快楽の春がすみかもやってきた。

ルネ・デカルトは言った。『生涯に一度は全てを疑ってみるべきであり、疑わしいものは虚偽であると考えるべきだ。しかし、疑っている自分を疑うことはできない』と。

私はこの頃自分を疑うことが多くなったけど、自然は疑わない。『エゴ コギト、エルゴ スム』のような自負はあまりアテにはできない。「我行

為す、故に我在らず」というようなひとときの方が確かなような気がする。胡蝶の夢ではない保証は何もないのだから。白馬岳北方稜線もその遠方にある群青のうねりも確かに存在する。思惟より汗が頼りがいがある。

山行の印象を拙い詩編に託して、

山 海

白稜のうねり 頂を刃巡れば
逆光の虚空 剱本峰過かなり
日本海の波頭 足下微細にして
深き群青の海原に仇なす
登ればすなわち
山低くして 海高し
雄大なる山塊といえども
渚のさざれ石に等しく
愛敬なる哉山、無辺際なる哉海
戯れよ風雪の峰、畏怖せよ豊饒の水底
見上げれば夢想、見渡せば慈愛
峻しき厳寒の山嶺は
春がすわる* 渡り木の海より眺むるがよし
剛毅朴訥 孤高を求むるに是非なく
山海の間に今あるを喜ぶべし
いざ 駆ける！ 北の山陵

* 渡り木とは雁など渡り鳥が日本海を横断する折に波間で休む時使う浮き袋用の小枝、日本にたどりつけば海岸線に捨てると言われている。その枝で粥を炊き食すれば、一年の息災が約束されるという。🍵

中島喜一氏を偲ぶ

三島義彦

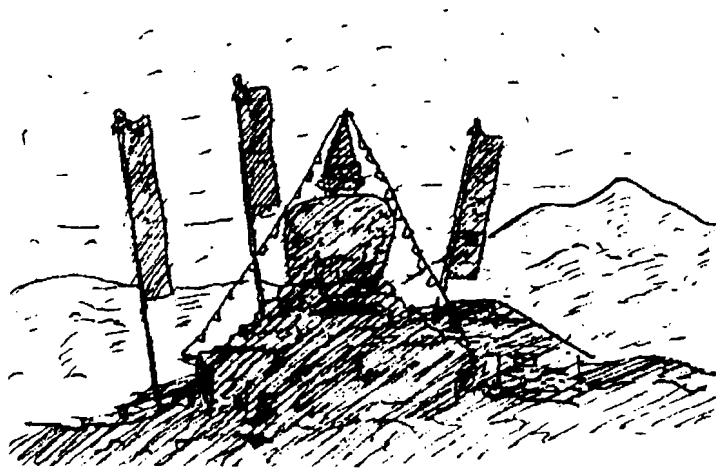
昭和11年夏に剱岳剱尾根で近藤榮氏の事故があったその後、秋に事故にめげず山岳部に入部されたのだったと思ふ。何分にも随分と昔の事だから、何処へ何人で山行したのか記憶に出てこないが、昭和12年冬の槍平での合宿の時、シールをとめているひもが凍ってほどけないので、吹雪いている中、小便をかけてひもの凍結をとかしてシールを外すといふ事があったと、何故か記憶にかすかに残っているが、ちがっているかもしれない。

易を信じ、日時と方をうらなって駅から徒歩5分以内の条件をつけて探して、平成4年暮撰津本山に移られ、脚が弱ってきたと山手の保久良神社へ一日おきに登って鍛えていられた。まめでなかなかと器用で、比良高津山荘の2階への階段の手すりを、留め具を持参し直ぐ近くから切り出した木を利用して取り付けられた。

大連、長春と旧満州の地を訪ねたり、稚内から釧路まで車を走らせ、噴煙の立ち上っている秋の旭岳を楽しまれたり、早々と白神山地を探行されるなど同好の人々と仲好会を作って殆ど毎月のように各地を旅行していられた。鮎つりにのめり込み、山のスケッチにも熱心だった。

平成5年10月旅行で、友人と2人でヘリをチャーターしてカトマンズからゴラパニへ飛んでゴラパニで一泊し、翌日むかえに来てもらって更にキャンジンゴンバへ飛んで、森本君等の冥福を祈ると共に、60年余り抱いていたヒマラヤへの想ひを果たされた。ただ、翌年には関空からの直行便で飛び、ホテルエベレストビューに泊まってエベレストの展望を楽しむ計画をたて乍ら、とうとう果たされなかったのは心残りであり残念だったろう。

平成8年3月7日没。80才。徳誠院釋峰西。合掌。寂しい。



先日の総会で山小屋を作るための準備委員会の発足が提案され、承認された。小屋を作るなど寝耳に水の話である。まあいいか、と思っていたら今度は突然アンケートを送ってきた。総会に出席されていない大多数の会員の方は驚かれたことだろう。なにしろ総会に出席しているのは会員約130名のうち40名弱である。私もびっくりした（私は因らずも会の幹事などという役目をおおせつかっているが、ここまでの進展について事前審議あるいは連絡などは全くない）。準備委員会発足の主旨として、会の小屋を作ることの是非を審議したいとのことだったので、これからいろいろな審議がされることだろうとタカをくくっていた。このアンケートでいったい何をしようとしているのか。まさかこれで多数決をとって小屋を作るか作らないか決めるというのだろうか。

そしてアツという間に結果の集計が送られてきた。賛成多数。準備委員会イコール小屋推進派の得意な顔が思い浮かぶようである。準備委員会はこれで解散するという。そもそもこの準備委員会とは何をするためにできたのか、今もって全く理解できない。推進派の皆さんの気持ちが一所懸命であるということだけは理解できた。

山小屋アンケートの謎 矢倉 睦

だからといって会の小屋を作るということにはなるまい。それだけでいいなら推進派だけの小屋を作ればいいのである。アンケートに意見としてあったように、誰がどういう方法で小屋を管理するのか、どの程度のメンテナンスが必要なのか、費用は年間いくらかかるのか、お金は何処から出すのか、小屋はいつまで所有するのか、会の小屋として次代に引き継ぐなら若手の意見はどうか、などなど、いろんなことを検討した後でなければ自分の意見など持てはしない。また根本的に小屋を作ることが会の目的にかなっているのか、どうしてそこから始めないのだろうか。推進派のかたがたは前々から考えていたんだという。推進派だけで和気藹々としていても意味はない。

材料のないまま、アンケートは実施された。しかも選択肢は「賛成」と「反対」だけ。「わからない」は存在しなかった。ある人は、どうもよく内容がわからないので準備委員会の人に電話すると、「これはもう決まったようなものだから」と言われたという。それなら反対しても仕方ないと賛成に○をした。アンケート棄権も許されなかった。電話で追い込みがかかったという。推進派のOBに電話されて「はい」と言った若手もいたとか。

送られてきたアンケート結果、一体どういう力を持つのか。次回幹事会が楽しみである。

編集後記

◆5年ぶりに行われた新人合宿に参加してきた。5年前に新人だったのは今はOBとなった高尾である。しかしその後が続かない。今の現役というの、どたくつからやってきた山岳部2年生の吉元をリーダーに、あと3人が素人だ。それでも合宿は9名という久しぶりに大人数の参加で、5月の合宿はこんなに楽しいものだったと思出すことができた。あとは新人達がこれからの様々な季節の山行を楽しみ、経験として蓄積してくれることを祈るのみである。

1年を通じて合宿・トレーニングを行うことの困難さは想像に難くない。まずリーダー層の薄さが問題になるだろう。岩トレのリード不足。合宿に参加できる若手のOBなぞいるだろうか。我々を若手と言うならば、我々もまた層のうすい年代なのである。OBとして現役に一体何がしてやれるのか、私自身考え込んでしまう。

現役奨学金制度をつくらうとか、海外山見物旅行資金貸し出し制度を作ってはとか、幹事会でも検討中である。OB諸氏が懸命になっている山小屋と現役のこととは勿論別問題ではあるけれども、皆さんの興味と援助の手をもっと現役にも向けてほしいと思う。

◆『山小屋アンケートの謎』は私個人の意見です。何かこのままアツと言う間に小屋を作ってしまうような雰囲気なので、警告の意味を込めて書きました。反論、またご意見あればお送り下さい。

◆東京支部の活動計画、楽しみです。他の地域の皆さんはいかがですか。また報告などお寄せ下さい。石川県へ移っていった同期の青島靖君の個人的な山行記録集『野良犬通信』を送っていただきました。彼らしい地道な、地に着いた登山は衰えを知らず、頼もしく感じます。これからも期待される人材でしょう。【む】